

<研究ノート>山東省の古代文化と日本弥生文化の源流：考古学資料を中心として

著者	蔡 鳳書
雑誌名	日本研究：国際日本文化研究センター紀要
巻	25
ページ	263-277
発行年	2002-04-30
その他の言語のタイトル	The Origin of Province of Shandong Ancient Culture and Japanese Yayoi Culture
URL	http://doi.org/10.15055/00000682

〈研究ノート〉

山東省の古代文化と日本弥生文化の源流

——考古学資料を中心として

蔡 鳳 書

山東省は中国大陆の東部に位置し、黄海に臨み、日本列島とは海一つで隔たっている。この地区は古代の文化の発達したところで、旧石器時代の人類化石と遺跡は既に数十か所も発見されている^①。旧石器時代の後に、中石器時代がおとずれる。

中石器時代は、旧石器時代から新石器時代への過渡期である。それゆえ中石器時代の遺跡は世界でも数が少ない。中国でも非常に珍しく、現在にいたるまで全部で五か所しか発見されていない。その中で山東省が五分の一を占めている^②。今から八千年以前に遡るいわゆる後李文化（一九六五年初めに山東省の淄博市の後李で遺跡が発見されたが、一九八〇年代に山東省済南市郊外でも発見されたので、「西河文化」ともよばれる）は主に山東省の西部地区に分布している^③。その文化は、年代の上で日本の縄文文化の草創期に大体相当しているが、今まで両者の間にどのような関係があったかは不明である。その後、

北辛文化（最初に山東省滕県で北辛遺跡が発見されたので、初めの発見地により命名した。年代は紀元前五〇〇〇年前後）、大汶口文化（紀元前五〇〇〇～二六〇〇）、龍山文化（紀元前二六〇〇～一九〇〇）などが続いている。以上の原始文化は日本の旧石器時代、縄文時代後期までの諸文化とは殆ど関係がないと思われる。

夏の時代（紀元前二〇〇〇～一六〇〇）になると、古代中国の政治の中心地は今の河南省西部にあり、山東地区は当時の僻地であった。だが、いわゆる「東夷文化」とその創造者東夷人は有名である^④。東夷人は、商王朝成立の初期（紀元前一六〇〇～一四五〇前後）にはこの王朝と友好関係を有したが、中後期になると関係は悪化し、しばしば商王朝と抗争した。商王朝の支配者は東夷人をなかなか滅ぼせなかった^⑤。いわゆる「百たび東夷ヲ克ツ」という語こそは、まさしく商王朝と東夷との激戦の様相を反映した句といえよう。周の時代

(紀元前一〇〇〇～二二二)になると、山東地区に齊・魯の両大国をはじめ、大小さまざまな数十か国がひしめいた。古代の山東地区の人々は東夷文化を基盤に、中原地区の文化を吸収して、新たに齊魯文化を創造した。当時山東地区は農業の発達だけでなく鑄鉄、製塩、紡績、陶磁器生産などの手工業が発展を遂げ、全国的に見て、商業の先進地域となっている。さらに重要なことはこの時期には孔丘、孟軻、管仲、墨翟、孫武等のごとき多くの著名な思想文化、科学技術、軍事の大家が現れたことである。彼らは中国だけでなく、更に世界の文化史上にも不滅の功績を遺した。

発達した文化は必然的に周辺地区に影響を及ぼす。山東省の沿海地区は日本列島に近いので、春秋時代から(紀元前六世紀)人々は海外に渡航していたと考えられる。秦・漢時代(紀元前三世紀から紀元後二世紀まで)は日本の縄文末期と弥生時代にあたっている。その時代はちょうど寒冷気候の為に山東半島、日本列島間の距離は短く、さらに当時の航海技術の向上により、中国人・日本人の双方が山東半島、日本列島間を往來することは、困難なことではなかったことも考えられる。考古学の発見成果の研究を深めれば、必ず新しい成果が上がるであろう。

周知のごとく、日本の弥生文化の発見は十九世紀末の一八八四年東京本郷の弥生町における縄文文化と異なる文化遺跡の発見に始まり、すでに百余年の研究史を有する。弥生文化遺跡の発見は日本の

考古学史上の大事件である。というのは、弥生文化は日本歴史上の文明発生の前夜にあたり、伊東俊太郎教授の説によると、この時期はいわゆる「農業革命」の時代であった。鉄器や青銅器が大陸から伝来、定着し、生産されるようになり、これに伴い稲作農耕がしだいに九州から東北地方まで普及し、高床様式の建物も普及、土器は露天焼成から初源的な窯焼成へと変わって、死者を墳丘を持つ墓に埋める風習もこの時期に生まれたのであった。

現在日本では弥生文化は突然出現したものではなく、縄文文化の基礎の上にアジア大陸からの各種の文化要素を吸収し、新時代に適応した文化要素の再創造上に形成されたものであると考えられている。この説は日本の学界ではおおむね定説になっている。

日本の学者達は大陸文化の要素を吸収する問題に関して、三つの方面を考えている。第一は、ロシア極東地区のカラスク文化の要素である。この方面でもっとも顕著な特徴は青銅器の製法にあり、この件に関しては樋口隆康氏が多くの分析を行っている^⑧。第二は、朝鮮半島から伝えられた文化的特徴である。この方面の例証は数多くあるが紙面に限りがあり、その挙例を割愛させていただく。この第二点については朝鮮半島伝来の文化的特徴が、本来は中国大陸文化の特徴であるという点を指摘せねばならない。特に前漢初期に漢の武帝が朝鮮半島に楽浪四郡を設置してから、中国文化は朝鮮半島に広範に伝わり、間もなくこれらの文化の特徴がまた日本列島へ伝わ

ったのである。いわゆる日本の古代文化の形成における朝鮮半島文化影響説は、つき詰めていえば、中国大陸文化の日本列島における屈折反映説ということになる。第三は中国大陸の新石器時代晩期からの影響であり、これこそが本論文において明らかにしたい主要な点である。

前述のごとく、山東地区は夏・商の時代にあつては、中国の政治、文化の中心地ではなかったが、それは決して物質文化、精神文化において未発達のままであつたことを意味しない。山東地区の各種の文化が半島を通じて外部に伝わつていったことも、大陸と海を結ぶ地勢から考え、十分推定し得るであらう。

私は、少なくとも以下の幾つかの面で日本の弥生文化の中に山東省の古代文化要素を見いだすことができると考える。

第一は、山東半島はイネと稲作農耕技術を日本列島に伝えた重要なルートであるということである。

いうまでもなく日本列島の稲作の農耕技術がどのように伝播したかという問題はここ五十年余日本および日本以外の学者達が関心を寄せてきた重大な学術テーマの一つである。七十年前、スウェーデンの学者アンダーソン（一八七四—一九六〇）は日本の弥生時代に始まつた稲作が中国の華北地区から列島に伝わつたと推察したが、証拠不足のために否定された⁹⁾。日本民俗学の雄、柳田国男（一八七五—一九六二）は、イネは海上ルートにより沖繩群島を経由して、

日本の九州地区に伝えられたと考えた¹⁰⁾。安藤広太郎は、イネが中国の江南地区から直接日本の西南部地区（今の九州北部と本州の西端）に伝わつたと述べている（更に細かく三つのルートに分けられる）¹¹⁾。

ここ十数年間に中国の長江流域中部では世界で最も早い時期のイネと稲作農耕遺跡が発見されている（今から一万年以上前）。その発見により中国は世界史上、もっとも早期に水稻耕作が開始された地であることが確認された¹²⁾。北京大学考古文博院の嚴文明教授と日本の奈良国立文化財研究所の町田章先生を代表とする人達は、耳目を一新させる別の学説を提出するにいたつて¹³⁾。この説によれば、

最初に、中国の長江中流地区で始められた稲作技術が先ず長江に沿つて下り、今の江蘇省の南部と浙江省北部地区に到達し、続いて山東地区に向かい、さらに山東半島から渤海湾を通じ遼東半島に至り、朝鮮半島を経由して、日本の九州地区に到達したというのである。

この考え方は一見、ルートがあまりにも曲折し、不合理にも思われるが、近年来多くの考古学資料による実証の結果、ますます信憑性が高まつている。

上述の嚴教授らの考え方がもし確定したら、山東省において発見された稲作農耕遺跡は一層重視されるであろう。もちろん稲作農耕遺跡が最も多く発見されるのは長江流域であるが、山東省内の発見遺跡はますます増えている。一九八〇年代には栖霞県の楊家圈遺跡¹⁴⁾、一九九〇年代初期に日照市の堯王城遺跡¹⁵⁾、一九九〇年代中期滕州市



図1 山東省の地理位置と先史時代の稲作農耕遺跡

ている。前の二か所はイネの粃殻で、後の二か所は炭化米である。農学研究者の研究によれば、これらはみなジャポニカ米に属する。楊家園で発見されたイネについて、嚴文明教授は次のごとく論じている。「楊家園遺跡は北緯三七度二〇分であり、いままで知られている先史時代稲の分布地域の中で最も北にある遺跡である。この発見によって、稲作農業の日本への最初の伝来のルートが一層明らかにされた。かつては、北のルート、中のルート、南のルートなどの諸説が提唱されたが、中と南のルートは実際にあまりにも不可能である。北のルートはいままで証拠はなかったが、楊家園遺跡の稲の

の莊里西遺跡^⑮、最近では日照市の岡城鎮遺跡でイネが発見されている^⑯。これらのイネの遺跡年代は紀元前五〇〇〜二〇〇〇年の間の山東龍山文化中期と晩期に属し

発見は、北のルートの説の方が説得力があることを示している^⑰」(分布は、図1 山東省の地理位置と先史時代の稲作農耕遺跡を参照)。以上のことから、日本列島と朝鮮半島における発見を結びつけて考えるならば、日本列島の稲作農耕の始まりは紀元前一〇〇〇年前後に遡ることができよう^⑱。現有の確認された考古学資料では、稲作はこの時代よりも早い時代まで遡ると言うことはできない。『朝日新聞』の報道によると、一九九四年に日本の岡山県で四五〇〇年前、即ち紀元前五〇〇年のイネ葉の痕跡(フランドトオパール)が見つかったと言われるが、真の結論は将来の確実な出土品の発見を待たなければならない^⑲。

注目に値することは、朝鮮半島は中国のイネが日本列島に伝わるルートと考えられるにも拘らず、稲作農耕の始まりの年代が大体日本と同じか、或いは日本より少し遅いことである。このことは別の角度から見れば、山東半島のイネが朝鮮半島に伝わる一方で日本列島に直接伝わった可能性を示唆するものかも知れない。これまで山東省で発見された稲作農耕遺跡の大部分は、黄海の沿岸にあって、もし黒潮を避ければ山東半島から直接航行して、日本の九州に着くことも、容易なことだと考えられるからである。

第二に、山東省は黒色陶器(黒色研磨土器)の原郷と言われていることである。かつて日本の学者は、日本の九州地区に多く見られる縄文晩期の黒色研磨土器が山東省龍山文化の影響を受けたものと

考えたことがあったが、現在のところ実証するに十分な材料に乏しい。

私は一九八八年に福岡県、大分県、宮崎県などを調査したことがあり、各地の文化財研究センターと博物館の研究者の教示のもと、九州地区に出土した黒色研磨土器を観察する機会を得た。私見では、土器の全体器形や胎土の構成或いは質感、手触りから、山東省出土の龍山文化黒色陶器とは大いに異なっている。しかしある事実がわたしの注意を惹いた。それは土器の施紋方法で（黒色研磨土器に限らない）、ギザギザの歯を持つ工具を用いて乾燥前の土器の表面に削り傷をつけ、それを紋様としている。このことによって土器が堅固に仕上がるばかりでなく、且つ美しく見えるようになる。この技法は日本では既に縄文時代後期に始まっていたものである。このような土器製作の時に形成された紋様を、日本の学者は「刷毛目」と呼んでいるが、元福岡市博物館館長横山浩一先生に専論がある。過去中国の考古学者達はおそらく龍山文化の陶器の同類の紋様を「細い線紋」とか「細い縄紋」と呼んでいるが、実はこれらの紋様は縄紋や線紋とは別物である。

山東龍山文化の後継者たる岳石文化になると、「刷毛目」という技法はさらに普及していった。いわゆる岳石文化の実年代は、C¹⁴の測定によると、紀元前一九〇〇年から一六〇〇年までだが、その技法が日本列島に伝わった時期は縄文晩期にあたっている。

そのほか縄文文化後期の土器にいわゆる「磨消縄文」の施紋法が現れているのも注目される。いわゆる「磨消縄文」とは、土器に縄文を施した後、一部分の縄文を磨り取って、美しい縄文を残した部分と、それを磨り取り素紋とした部分が互いに現れるものをいう。

このような施紋法は、商代晩期、すなわち紀元前一四〇〇年以後の中国大陆に始まるが、日本海と近い江蘇省東部及び山東省の商代晩期の陶器に多く見られ、例えば徐州銅山商代遺跡と済南市の大辛莊遺跡では多く出土している。ここは紀元前八世紀前後に東夷の集合居住地であった。「磨消縄文」は山東半島でもよく見られる。日本列島で磨消縄文が最も盛んであった時代は縄文文化の後期と晩期及び弥生文化時期であり、このような施紋法は山東半島から直接日本列島に伝わったもので、朝鮮半島を経由していない可能性がある。そうでなければ、朝鮮半島の無文土器にも当然現れるはずだからである（図2 縄文文化後期の土器表面の磨消縄文と江蘇省山東省商・周時代の磨消縄文の比較を参照）。

第三に、周知のごとく縄文文化時期には日本列島の居住者は狩猟、採集、漁労を主要な生活手段としていた。この時期の石器は主として打製石器であり、ごく少数の磨製石器も祭祀や儀式を行うために使用されていた。一九九四年山形県の縄文文化晩期の遺跡で、磨製石斧が発見されたが、精巧に磨きあげた石斧の表面には符号が刻まれている。その符号の意味が不明だが、多くの学者はこの石斧が祭

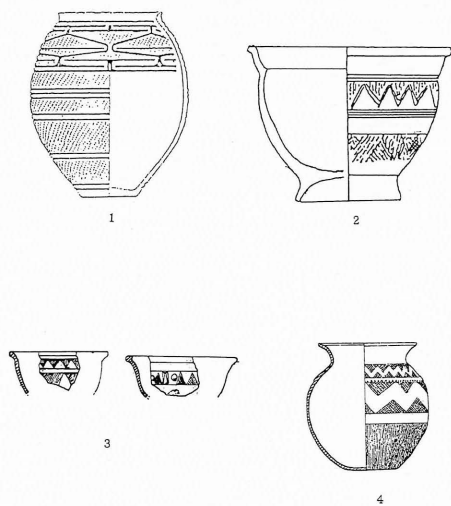


図2 縄文文化後期の土器表面の磨消縄文と江蘇省山東省商・周時代の磨消縄文の比較 1日本の縄文晩期土器 2山東省済南市の大辛莊陶器 3江蘇省徐州銅山丘湾陶器 4山東省乳山県南黄莊陶器

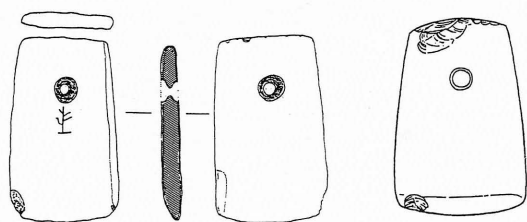


図3 山形県縄文遺跡から出土した符号を付けた石斧と山東省大汶口文化遺跡から出土した穿孔石斧の比較

祀用のものだと認定している。山形県から出た石斧は、外形から見れば、山東省の大汶口文化遺跡から大量に出土した穿孔石斧と殆ど同形である。これによって、この石斧は山東省大汶口文化から直接日本列島にもたらされたものであると認められている。縄文文化後晩期になり、稲作農耕の出現に伴い、大陸系の石器はすでに縄文人に受け入れられるようになり、弥生時代に及んだといえよう(図3 山形県縄文遺跡から出土した符号を付けた石斧と山東省大汶口文化遺跡から出土した穿孔石斧の比較図参照)。

弥生文化時期になると、大陸系の石器は稲作農耕の中で主要な地位を占めていた。これらの大陸系石器のなかで最も注意を惹くのは、

イネの収穫に使用する石刀である。日本の学者はこれを「石庖丁」と呼んでいるが、庖丁とはナイフの意味である。近代考古学が中国に伝わる前には、中国の学者は、あまり石庖丁の有無に注意を払わなかったようで、その名称は文献記録にも見えない。近代考古学が中国に入ってから、学者達は新石器時代の石質の収穫道具を「石刀」と呼ぶようになった。形からみれば、日本列島で発見された弥生時代の石庖丁は、大陸沿海一帯の「石刀」とよく似ている。

もちろん我々は一部の石刀が朝鮮半島を経由して日本に伝わったことを否定するものではない。しかし、山東半島の新石器時代の各遺跡で出土した石器数量統計から、紀元前二〇〇〇年前後における龍山文化

時期と紀元前一六〇〇年前後の岳石文化の石器の中で、石刀が大きな比重を占めることが判明する。山東省泗水県尹家城遺跡を例にとれば、岳石文化層から出土した石刀は、一三〇点を数え、発掘面積二〇〇〇平方メートルとして計算すると、一平方メートルあたり出土の石刀は〇・〇六五点となる。日本では弥生中期になると、鉄製品の普及によって、農具の大部分は石器から鉄製品に替わったが、石庖丁は末期にいたるまで大量に使用されつづけた。大阪府の池上弥生末期遺跡において、一平方メートルあたり出土の石庖丁が〇・

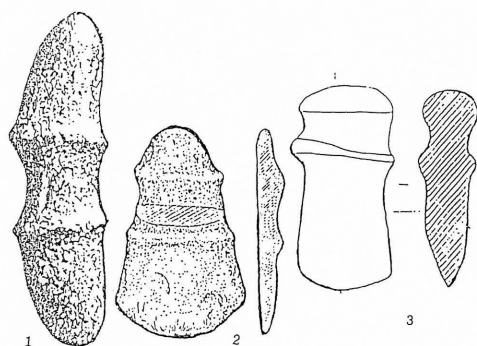


図4 带稜石斧と独鈷石の比較 1 独鈷石 2 吉林省西团山文化の带稜石斧 3 山東省岳石文化の带稜石斧

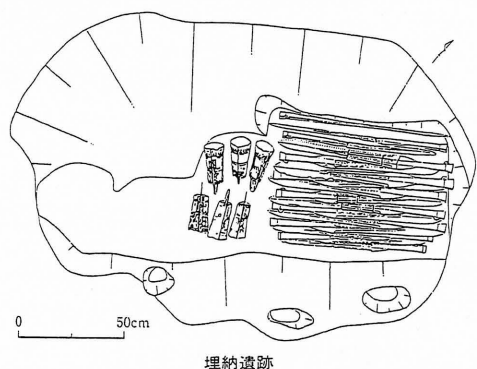


図5 島根県で銅鐔と銅矛が一括出土

○八四六点となることから見て、この両者は大変似通っている。縄文文化晩期には、日本列島各地に「独鈷石」と呼ばれる真中に二本のつば状の突起を持ち、両端が尖っている磨製石器が現れた。このような石器は何のために使われたのか、現在では判断できないが、多分祭祀に使用されたものではないかと推測される。この石器は中国内地の新石器時代から商・周時代の遺跡では発見されていないが、山東省の岳石文化にはよく似た石器があり、「带稜石斧」と呼ばれている⁽²⁾。ただ、山東省の岳石文化の「带稜石斧」は祭祀用具ではなく、農業用の道具であろうといわれる。両者を簡単に同じも

のと見なすことは出来ない。両者は形状がよく似ているだけである。しかし、推測の域にとどまるが、日本の「独鈷石」が山東省岳石文化の影響を受けている可能性が十分考えられよう(図4 带稜石斧と独鈷石の比較)。

第四、弥生文化時代の青銅器のありかたについてである。この方面については、日本の多くの学者が論述されている。二十余年前、京都大学考古学研究室の樋口隆康教授は、『古代史発掘⑤』のなかで「弥生時代青銅器の源流」というテーマを設け卓見を発表されている⁽³⁾。この論文で主に弥生文化が中国東北地区と中原地区、ロシア

の極東地区の文化に影響されている点に着眼し論述されている。ここ二十数年来、山東省内の商・周時代の墓葬と遺跡で多くの青銅器の発見があった。山東省出土の青銅器のなかにも、弥生文化の原始的要素を追求すべきであるが、私はこの方面に関しては研究を深めていないので、全面的に論述することはひかえる。

私はここで、弥生時代の最も重要な青銅器の一つである銅鐔に関わる思想の問題について述べてみたい。日本の学者は、銅鐔は大陸から朝鮮半島を経由して、日本列島に伝わってから祖形から離れ、いわゆる宗廟彝器^{いさ}から農業祭祀用具となったと考えている。しかしこの数十年の発見からみると、このような器物は青銅武器と同時出土しており、

既に六例が見られ、全部西日本で発見されている。とりわけ一九八五年夏の島根県荒神谷遺跡での発見は最も注目⁽¹¹⁾に値する。祭祀用具が武器と一緒に出土したことは、古代人が祭祀と戦争を同等に重要視していたことを意味している。これはまさしく古代山東に生まれた儒家經典『左伝』成公十三年三月の条に書かれている「国の大事は、祀と戎とに在り」(国家として最も重大の事項は祭祀と戦争である)を具体的、形象的に反映したものであろう。銅鐸と青銅武器が一括して出土している地点は、西日本が主である。これは恐らく西日本が山東半島と比較的近いという関係によるものであろう(図5 島根県で銅鐸と銅矛の一括出土)。

第五に考えるべきは、支石墓に関する問題についてである。支石墓はまたドルメンといわれ、世界規模で発見されている古代文化遺跡である。東アジア地区で言えば、中国東部沿海、朝鮮半島と西日本とは、一つの文化圏に属するが西日本の支石墓の多くは碁盤形で、いわゆる「南方式」である。その分布は九州の北部を中心として現在の佐賀県、長崎県、福岡県、熊本県、大分県に集中しており、宮崎県と鹿児島県にもあるが、その数は少ない⁽¹²⁾。本州では山口県にわずかに二基を発見するのみである。中国では東部沿海地区の遼東半島、浙江省沿海地区と山東省にあり、中国社会科学院考古研究所の研究員安志敏先生の観察では浙江省の支石墓と日本の九州の支石墓は形式の上で共通の特徴を持っており、日本の支石墓は江蘇省・浙江省

一帯の古代文化の影響を受けて形成されたといわれる⁽¹³⁾。遼東半島の支石墓で多く見られるのはテーブルの形をした、いわゆる「北方式」である。現在までに既に一〇〇か所余り発見されている⁽¹⁴⁾。中国の許玉林氏は遼東半島的大型石棚(本稿中の支石墓のこと)の時代は比較的早いとしているが、青山学院大学の田村晃一教授の見解は許玉林先生の見解とは全く異なり、大型の石棚のほうが時代は下がると考えている⁽¹⁵⁾。その当否は今のところ不明である。

韓国の一部の学者達は支石墓が朝鮮半島にもともと存在したと主張しているが、日本の学者達は西日本の支石墓は間違いなく大陸から伝播したものと見なしている。この点では中国と日本の学者の見解は基本的に一致している。私は支石墓の伝播のルートは単一ではないと考えている。支石墓の問題を考える時、往々山東省を見落とすことがある。山東省の支石墓の問題は現在のところまだはっきりしていない。七十余年前日本の人類学の創始者の一人鳥居龍蔵は淄川県(今の淄博市)の王母山と杜坡山で早くも二つの巨大な石棚を発見した⁽¹⁶⁾。前者は一九五八年に人為的に破壊されたが、鳥居の書いたスケッチとカナダのメンゼエス(Ar. M. Menzies)が撮った写真から、間違いなくこれが北方式の支石墓であることが分かる。後者は一九九二年私が田村晃一先生と一緒に調査した時、その石の重量が五〇トンにも達しており、人工物ではなく、自然石を使用したものであることが分かる。中国社会科学院歴史研究所の著名な考古学

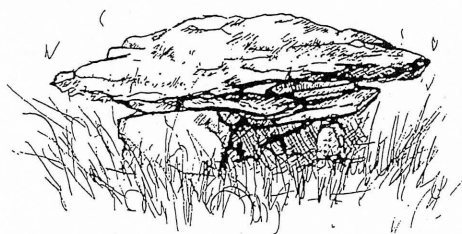


図6 山東省において発見された石柩（上）と日本の支石墓（下）

者の張政烺先生は、榮成市崖頭集に大石柩があることを言明された。⁽⁹⁾しかし私は三回も調査に行ったが、大部分が破壊されており収獲が得られなかった。なお、長期間日本に滞在旅行したこともある徐逸樵先生は一九八〇年代に山東省乳山県で支石墓を発見し、証拠写真も撮られたが、残念なことに、一九九三年私も参加した調査では、支石墓の地点が確定できなかった。しかし、乳山県の南黄荘で一九八三年北京大学と煙台文物管理委員会が共同調査を行った時には六基石柩石棺墓が発掘された。⁽¹⁰⁾ここでは墓の上に大石が置かれており、これらの墓は多分支石墓と関係があると思われる。山東省の他のと

ころにもこうした遺跡が発見された可能性がある。『漢書』「五行志」には、今日の萊蕪市に三つの足を持つ大きな石があるという記載がある。古代の中国人が紀元前後において、このような巨石があることを知っていた証拠であろう⁽¹¹⁾（図6 山東省において発見された石柩と日本の支石墓）。

第六に考えるべきは、戦国時代末期から秦・漢時代にかけて、多くの山東沿海地区の人々が日本列島に渡ったと推定されることである。

春秋時代末年から奴隸制社会は崩壊してゆき、混乱した不安定な社会となった。山東人たる孔子は、この状況を見て、「道行はれざれ、桴に乗り海に浮かばん⁽¹²⁾」と嘆いている。当時の人々が乱世から逃れ、海外に行って暮しを立てようとしていた可能性を示唆する語ではなからうか。山東地区から出発して、一番近い目的地は朝鮮半島と日本列島である。戦国時代になると、恐らく大勢の人々が日本列島に渡ったことであろう。

四十数年前、日本の有名な人類学者の一人である金関丈夫先生は山口県土井ヶ浜遺跡で出土した人骨を分析し、弥生人は「渡来人」であるという説を提唱された⁽¹³⁾。この説は一九三〇年代の人々の推測よりも科学的根拠を有する。一九六〇年代になると、金関丈夫先生は土井ヶ浜遺跡出土の弥生文化初期人骨の測量を行い、弥生時代人の身長は縄文時代人の平均身長より三センチ高く、さらに頭の長さ、

顔の広さなどの指数が中国大陸の人骨に近く、縄文時代人とは大きな差があると指摘した。⁽⁴⁵⁾これらの大陸からの「渡来人」はすべてが中国大陸から来たのではなく、朝鮮半島から日本列島に渡ってきた者もいる。一九九〇年代に中日両国の人類学者と考古学者は、この問題について、共同研究を実現させた。山口県土井ヶ浜人類学ミュージアムの館長、松下孝幸博士は何度も山東省淄博市を訪れ、山東省文物考古研究所の協力の下にこの地区に出土した秦・漢時代墓葬の人骨の計測と分析をされている。松下博士は、弥生文化時期の「渡来人」の故郷の一部は中国東部各省であると考えられている。⁽⁴⁶⁾

二〇〇一年、松下先生は「渡来系弥生人のルーツを大陸に探る」を発表され「北部九州・山口タイプの弥生人の『おおもと』が大陸にあるということは間違いなさそうである」と弥生人が渡来人であることを肯定された。⁽⁴⁷⁾

歴史伝説の徐市が日本へ渡ったという物語は、中国と日本の歴史愛好家の間で知られているが、徐市その人が実在したことを記す、『史記』始皇本紀（始皇廿八年の条）では、徐市は「斉人」であると明言されている。徐市はやがて伝説中の人物徐福に変身してゆくが、何故司馬遷は徐福を「斉人」といって、「楚人」、「越人」或いは「燕人」と言わなかったのであろうか。私は徐福が日本へ渡った代表であると考えている。古代の山東の人々は斉の古代の文化伝統をも携えて、日本列島へ行ったのであろう。日本の学者大阪大学の都

出比呂志教授が言われたように、戦国時代前後、大陸中国から海を渡り日本に到着し、同時に自分たちの宗教思想を列島に伝えたのである。⁽⁴⁸⁾

第七に考察すべきは、山東地区独自の古代風俗習慣が弥生文化に与えた影響についてである。

ここで先ず取上げるのは、古代の抜歯の風習である。中国では、紀元前三〇〇〇年前後に沿海地方において人々が青春期に入る前後に、前歯あるいは両側の切歯を抜く習慣が流行していた。山東省泰安市の大汶口遺跡、曲阜市西夏侯遺跡、江蘇省邳県大墩子と劉林遺跡にはつきり現れている。⁽⁴⁹⁾龍山文化時期になっても、この風習は継承している。日本の縄文文化時期にも抜歯の習俗があるが、中国と日本列島の抜歯の風習は必ずしも起源を同じくするとは限らない。縄文文化の中期末前後より縄文人の抜歯の部位変化が現れ、基本的に山東省大汶口文化時期及び龍山文化時期のものと同一となった。このことは、日本列島と山東半島双方の住民の間に、風俗習慣にある程度の関係がある可能性を示唆している。⁽⁵⁰⁾

次に取上げるのは鳥の崇拜についてである。縄文文化時期には多くの動物土偶が発見されているが、そのなかには猿、猫、イノシシ、蛙、熊、狼、蛇のほか名称不明の奇獣がいる。⁽⁵¹⁾注目すべきは、各地で発見された多くの動物土偶のなかに鳥の形象が殆どないという事実である。⁽⁵²⁾

世界史上から見て、鳥類は多くの民族や原始部族によって、天神と人民大衆との間のコミュニケーションの使者であるときみなされ、人々に崇拜されてきた。古代中国においても例外ではなく、特に山東省の大汶口文化と龍山文化時期にはこのような現象が顕著である。最近発見された大汶口文化と龍山文化には粘土で作って焼いた鳥だけでなく、石で作った鳥もある。陶器の造型にも鳥の形象を真似たものがある。山東龍山文化の遺物によく見られた「陶鬻」という陶器は「鶏彝」とも呼ばれる。

鶏も鳥類である。日本語では「ニワトリ」と呼ばれ、やはり「庭の鳥」の意味である。どうして「彝」とも呼ばれるのか。かつて一部の学者たちは「彝」が「彝器」（祭器）の意味だと考えたことがあるが、わたしの考えでは、太古時代には「彝器」という呼び方はなく、その民族或いは部族が好んで使用した器物をその民族あるいは部族の名前で呼んだので、山東省地区の古代人がよく鳥形陶器を用い、鳥を崇拜し、その上かれらは「夷人」とも呼ばれたので、鶏彝（鳥夷）とも呼ばれたものとおもわれる。この事について証拠を挙げると、紀元前二〇〇〇年前後の陶唐時代に中原地区に住んだある一つの部族が大量に陶鬻を使用したので、この部族を「有鬻氏」と呼んだ例がある。前述の如く古代の山東の人々は「夷人」と呼ばれている。中国の著名学者王献唐（一八九六—一九六〇）は「彝」は即ち「夷」であると考えていた。伝説中の炎帝と黄帝の時代には、

夷人の一部が中国の西南部（今の雲南省、貴州省、四川省と広西壮族自治区など）に移動した。それが今日の彝族だといふのである。³⁴ 中国における最古の日本史の記述は『三国志』の魏志倭人伝と『後漢書』東夷列伝の中の倭伝にある。古代日本人（即ち倭人）は「東夷列伝」に入れられている。伝説中の炎帝と黄帝の時代に、今の山東省東南部に「郯」と呼ばれる諸侯の小国があったが、この国は今日の山東省の郯城県にあたり、春秋時代にも存在し続けている。古代郯国の人は自らを少昊氏（しやうこうし）の末裔と称したことは『左伝』昭公十七年の条に見える。少昊氏は鳥の名前を用いて官吏の名称とした。いわゆる「少昊氏は鳥を以て官に名づく」という伝説である。この国が紀元前五世紀まで続いたことは『左伝』定公三年の条に見える。

日本列島では、弥生時代になると、鳥に対する崇拜がにわかには始まった。³⁵ 大阪府池上曽根遺跡と鳥取県の西川津遺跡において、弥生時代の鳥形木製品が発見された。大阪府立弥生文化博物館の館長金関恕氏はこの事について、卓見を述べておられる。³⁶ 最近、北陸地区の石川県小松市でも弥生時代の鳥形木製品が発見された。³⁶ その他に山口県土井ヶ浜において水鳥を抱いている女性の墓が発見されている。このことは、古代日本人の鳥崇拜が弥生時代に新しい高まりを見せたことを表している。中国社会科学院考古研究所石興邦先生も弥生時代の鳥に対する崇拜は山東原始文化の影響を受けて現れたものであると考えられている（図7 山東省新石器時代の鳥形陶器と日

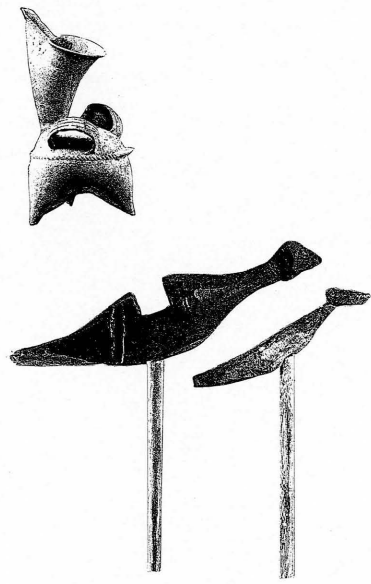


図7 山東省新石器時代の鳥形陶器（上）
と日本弥生時代の鳥形木製品

本弥生時代の鳥形木製品。

さらに注目に値する現象であるが、九州西北部の佐賀県唐津、菜畑遺跡で一本の木の棒にイノシシの頭骨数個を一緒に通した遺物が出土している。^⑧この二か所は、ともに弥生中期の遺跡である。一九八〇年代末頃の考古学発掘資料によると、大分県下郡桑苗遺跡にも同様の状況が見られる。^⑨一九九〇年代中頃に、岡山県南方遺跡（弥生中期）にも一二体のイノシシ（ブタ）が並んだ状態で発見された。^⑩このことから、日本の学者は弥生時代にはイノシシは食用としたのみでなく、重要な祭祀用の犠牲獣としても用いられたのであり、イノシシの頭骨を木の棒に通して一緒にするのは、その表れであると考えられている。^⑪

このような現象は中国の考古学者にとっては、すでに周知のこと

がらに属する。すぐ我々が連想するのは山東省大汶口文化と龍山文化時期にブタとブタの頭、あるいはブタの下顎骨を副葬品としていたという事である。山東省泰安市大汶口墓地の第十三号墓では、一度に一四頭のブタをもちいている。^⑫山東省胶県三里河龍山文化遺跡では、ブタの下顎骨を副葬品とする現象はよく見られる。^⑬これ以外でも、曲阜市西夏侯遺跡、諸城市の呈子遺跡、臨朐県西朱封遺跡、泗水県尹家城遺跡、兗州市西呉寺遺跡、濰坊市姚官莊遺跡などの大汶口文化或いは龍山文化遺跡でもよく見られる。わたしは埋葬の儀式も祭祀活動の一面であり、弥生時代において日本の九州西北地区で盛んに行われたイノシシの頭骨を一本の木に通すという祭祀活動は多分中国東部沿海地区、特に山東省の新石器時代文化晩期におけるブタ、ブタの頭、或いはブタの下顎骨副葬儀式の変化したものであろうと考えている。ただしこれが古代の東夷人の文化を代表する習俗であるのか否かについては、実証的研究を深めてゆかなければならない。

なお、中国の唐代の地理著作『括地志』外蕃条に、古代の肅慎族の「葬には即ち木を交して椁を作り、猪を殺して椁上に積み、富者は数百に至り、貧者も数十、以て死人の糧となす。」という風習が記録されている。肅慎族は古代に中国東北地区に居住していた民族の一つである。この民族は山東の夷人と、さらに日本列島の東夷人との間にどのような関係を有するか。この文献の資料がどのように

考古学資料と関連づけられるか、いっそう詳しく検討されねばなるまい。

注

- (1) この十数遺跡は沂源県、蓬萊県、新泰市、長島県、沂水県、日照市、郯城県等の地にある。
- (2) 文物出版社編『新中国考古五十年』一九九九年刊 二二三頁
他の四つの中石器時代遺跡は、沙苑遺跡、靈井遺跡、下川遺跡と青海省の拉伊亥遺跡である。
- (3) 王永波他「海岱地区史前考古的課題——試論後李文化」『記念城子崖遺跡発掘六十周年国際学術討論会論集』齐鲁書社 一九九三年刊所収
- (4) 山東省も夏王朝の中心地であるという説もでている。——邹衡「于探 夏文化条件」『夏商周考古学文集』科学出版社 一九八八年刊 四二頁
- (5) 李琴「試論鄭州双橋遺跡的商文化」河南博物院『河南博物院落成 河南省博物院 七十周年念文集』中州古籍出版社 一九九八年刊所収
- (6) 伊東俊太郎『文明の誕生』講談社 一九八八年刊
- (7) 金関恕・佐原眞「稲作の始まり」『古代史発掘④』講談社 一九七五年刊 二二—二七頁
- (8) 樋口隆康「弥生時代青銅器の源流」『古代史発掘⑤』講談社 一九七五年刊 八七—九五頁

- 筆者中国語翻訳文『弥生時代青銅器的源流』は『遼海文物学刊』一九九五年二期を参照されたい。
- (9) 樋口隆康『日本人はどこから来たか』講談社新書 一九八一年刊
 - 筆者中国語翻訳文『日本人從何処而來』山東大学出版社 一九九六年刊
 - (10) 新編『柳田国男集』十二卷 筑摩書房 一九七九年刊 一一—五〇頁
 - (11) 安藤広太郎『稲の日本史』筑摩書房 一九六九年刊
 - (12) 中国の湖南省道県において発見された稲は一万年の歴史がある。嚴文明・安田喜憲編集『稲作、陶器和文明的起源』文物出版社 二〇〇〇年刊 三一—四二頁
 - (13) 嚴文明「中国農業稻作的起源」『農業考古』一九八二年第一期所収
 - (14) 山東省文物考古研究所、北京大学考古実習隊「山東栖霞楊家圈遺跡発掘簡報」『史前研究』一九八四年三期所収 北京大学考古実習隊、山東省文物考古研究所「栖霞楊家圈遺跡発掘報告」『殷東考古』文物出版社 二〇〇〇年刊 一五一—二〇六頁
 - (15) 『中国文物報』一九九四年一月二十七日
 - (16) 『中国文物報』一九九七年一月五日
 - (17) 中美聯合考古隊 一九九八年発掘調査資料による。
 - (18) 嚴文明「殷東考古記（代序）」前引『殷東考古』 二二頁
 - (19) 中村純「C-14年代測定の追加資料について」『菜畑』一九八二年所収

- (20) 『朝日新聞』 一九九四年三月二十一日記事
- (21) 賀川光夫「縄文時代の農耕」『考古学ジャーナル』2 一九六六年所収
- (22) 横山浩一「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』二二号所収
- (23) 南京博物院「江蘇銅山丘灣古遺跡的発掘」『考古』 一九七三年二期所収
拙文「済南市大辛莊商代遺跡的調査」『考古』 一九七三年五期所収
- 北京大学考古実習隊他「乳山南黄莊石椁墓」前掲『胶東考古』二五三頁
- (24) 『縄文文化の研究』III巻 雄山閣 一九八三年刊
- (25) 浅川利一「山形県の縄文遺跡から出土した中国古代有孔石斧について」『多摩考古』第二五号 一九九五年四月所収
- (26) 山东大学考古学教研室「泗水尹家城」文物出版社 一九九〇年刊 一三八頁
- (27) 金関恕・佐原眞「稲作の始まり」『古代史発掘④』講談社 一九七五年刊 四〇―四五頁
- (28) 酒井龍一「石器組成からみた弥生人の生業行動パターン」『奈良大学文化財学報』一九九三年所収
- (29) 拙稿「初論岳石文化」『記念城子崖遺跡発掘六十周年国際學術討論会論集』齊魯書社 一九九三年刊所収
- (30) 前掲「弥生時代青銅器の源流」
- (31) 金関恕・佐原眞編『弥生文化の研究』VIII巻 雄山閣 一九八七年刊 図版PL・14
- (32) 田村晃一「東北アジアの支石墓」『アジアの巨石文化』六興出版社 一九九〇年刊 二五七―三〇四頁
- (33) 安志敏「浙江瑞安、东阳支石墓的調査」『考古』 一九九五年七期所収
- (34) 遼寧省文物考古研究所編『遼東半島の石棚』遼寧省科学技術出版社 一九九四年刊
- (35) 許玉林「遼東半島石棚綜述」『遼寧大学学报』 一九八一年一期所収
- (36) 田村晃一「遼東石棚考」東北アジア考古学研究会編『東北アジア考古学』第二編 一九九五年所収
- (37) 鳥居龍蔵「中国石棚之研究」『燕京学報』 一九四六年十二月所収
- (38) 方輝『明義士及其藏品』山東大学出版社 二〇〇〇年刊 図版貳
- (39) 張政烺『五千年来的中朝友好關係』開明書店 一九五一年刊
- (40) 徐逸樵『先史時代的日本』三聯書店 一九九一年刊 一三九頁 図3
- (41) 北京大学考古実習隊他「乳山南黄莊石椁墓」前掲『胶東考古』二四八―二四九頁
- (42) 『漢書』「五行志」に次のようにいう。「孝昭元鳳三年、泰山萊蕪山南、凶凶有数千人声、民視之、有大石自立、高五丈、大四十八围、入地深八尺。」
- (43) 『論語』公冶長篇

- (44) 金関丈夫「人種の問題」『日本考古学講座』第四巻 雄山閣 一九五五年刊所収
- (45) 金関丈夫「弥生時代人」『日本の考古学』III 河出書房 一九六六年刊 四六〇—四七一頁
- (46) 松下孝幸『日本人と弥生人—その謎の関係を形質人類学が明かす—』祥伝社 一九九四年刊
- (47) 松下孝幸「渡来系弥生人のルーツを大陸に探る」『日本人と日本文化』No.15 二〇〇一年一月所収 三四頁
- (48) 都出比呂志「農業社会の形成」『講座日本史I』岩波書店 一九八三年刊所収
- (49) 顔闔「大汶口新石器時代人骨的研究報告」『考古学報』一九七二年一期所収
「西夏侯新石器時代人骨的研究報告」『考古学報』一九七二年二期所収
- (50) 拙稿「山東省先史時代文化の一—大汶口文化」『古代学研究』一九八四年一期所収
- (51) 江坂輝弥「土偶芸術と信仰」『古代史発掘③』講談社 一九七五年刊 一三六—一三九頁
- (52) 一九九九年茨城県ひたちなか市三反田蛭塚貝塚で、縄文時代後期前半の鳥形土製品二点が発見されたことは、恐らく全日本でも例がないだろう。朝日新聞社編『古代史発掘総まくり』二〇〇〇年刊 四八頁
- (53) 王献唐『炎黄氏族文化考』齐鲁書社 一九八三年刊
- (54) 大阪府立弥生文化博物館編『弥生文化—日本文化の源流をさぐる』一九九一年刊 五〇—五一頁
- (55) 金関恕「神を招く鳥」『小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社 一九八二年刊所収
- (56) 文化庁編『発掘された日本列島』朝日新聞社 二〇〇〇年刊 三二頁
- (57) 石興邦「山東地区史前考古的有關問題」『山東史前文化論文集』齐鲁書社 一九八六年刊所収
- (58) 唐津湾周辺遺跡調査委員会編『未盧国』六興出版社 一九八二年刊
- (59) 大分県教育委員会編『大分県文化財調査報告書八十集—下郡桑苗遺跡』一九八九年刊
- (60) 酒井龍一「弥生の世界」田中琢・佐原眞監修『歴史発掘⑥』講談社 一九九七年刊所収 七一頁第85図
- (61) 福岡県教育委員会編『弥生文化の成立と東アジア』学生社 一九八九年刊
- (62) 山東省文物管理处・済南市博物館編『大汶口』文物出版社 一九七四年刊
- (63) 中国社会科学院考古研究所『胶県三里河』文物出版社 一九八八年刊